

報告

照井一宅『莊子解』小考  
—盛岡藩の学問—

A Research of TERUI Ittaku's "Souji-kai"  
-Studies of the domain of Morioka-

高野淳一\*

Junichi TAKANO

**Keywords:** TERUI Ittaku, Souji-kai, the domain of Morioka  
照井一宅, 莊子解, 盛岡藩

1. はじめに

照井一宅（1819～1881年）は、名を小作、全都说い、一宅、蟠螭齋と号した。盛岡藩の藩校、明義堂（のちの作人館）の助教をつとめた。

かれの著作としては、代表作として『論語解』のほか『莊子解』などが伝えられるが、本稿ではそれら著作のうち、『莊子解』の分析を試みてみたい。

照井一宅については、中村安宏「盛岡藩儒、照井一宅と江幡五郎の思想」（『哲学資源としての中国思想—吉田公平教授退休記念論集』所収、研文出版、2013年3月）が、幕末期における盛岡藩を代表する儒者として江幡五郎（1827～1879年）と共に取り上げ、一宅の『中庸旧本』『大学旧本』を中心に分析・考察し、一宅が東条一堂（1778～1857年）の著作から刺激を受けつつも独自の經典解釈を示しており、特に一宅が「人間の本质は「交り」＝「互ニ厄介スル」ことにあるとする理解を掲げ、さらに身分の上下を問わず「人ヲ服スル」ためにはどうしたらよいかを示し」ていることを指摘する。中村氏のこの論文は、照井一宅の思想全体を視野に入れ、東条一堂の思想との比較を試みて、一宅の学問の傾向を江戸期の学問全体の中で捉えようとしたものである。

本稿では、中村氏の論文を踏まえながら、中村氏がまだ触れていない『莊子解』を取り上げてその読解を試み、主に中国思想から見た照井一宅の学問の一面を明らかにし、幕末から明治維新期にかけての盛岡藩の学問、学芸の状況を考える一つの端緒とすることを目指したいと思うのである。

行論の仕方としては、最初に照井一宅の生涯を簡単に辿った後、『莊子解』の注釈の態度、特徴を指摘し、その後で『莊子解』の注釈の中身、その特徴について分析することとしたい。

2. 照井一宅のこと

照井一宅の生涯については、中村氏前掲論文のほか、長岡高人『盛岡藩校作人館物語』（熊谷印刷出版部、1980年）が手際良くまとめて述べている。ここでは、そ

れら先行研究を参照しつつ、『南部叢書』第十冊所収の『莊子解』解題、続日本名家四書注釈全書所収の『論語解』所載「照井先生遺範碑」、『岩手県史』、『盛岡市史』などを主な材料とし、一宅の生涯を、筆者なりにおおまかに辿っておきたいと思う。

照井一宅の父は小兵（全秀）といい、天保年間に禄を取り上げられ、盛岡城外の鶴飼村に住まいした。一宅は、貧しい生活の中で幼少の頃より父親によく仕え、父親の病に当たっては、その孝養を尽くすありようが人々を感じしめたという（『莊子解』解題、「照井先生遺範碑」）。

生まれつき学問を好み、当時は家に四書一部があっただけであったが、父親に仕える暇に四書を玩味熟読し、得るところが多かった。四書のほかに、『荀子』『莊子』『左伝』『国語』を良く学んだという。そのご中島豫齋に学び、次いで古澤温齋に從学した（『莊子解』解題、「照井先生遺範碑」）。

盛岡藩の御稽古場は、天保11（1840）年に拡張、明義堂と命名され、文学館、医学館、武術館という三部制を取った。この明義堂が、慶応元（1865）年にさらに拡張され、作人館となるのだが、一宅は、嘉永5（1852）年、35歳の時に、明義堂の助教兼侍読に就任する（『岩手県史』）。明治維新期には、南部利恭公を知事とし、東次郎を大参事とする中、小参事として新政に貢献することが少なくなかったとされる（『莊子解』解題）。

かれの著作としては、代表作『論語解』の他に、『大学解』『中庸解』『孟子説』『莊子解』があり、またその他の著作として「封建論」「礼楽論」「湯武論」「莊子説」という論文があったと伝えられる（『莊子解』解題）。

『盛岡市史』は、幕末の学者の著作のうち見るべきものとして、一宅の『論語解』『莊子解』を挙げ、またかれの学問について、清末の大儒、章炳麟が激賞したことを伝える。長岡高人前掲書は、「照井先生遺範碑」を踏まえ、一宅の読書法について、「やや書物の大意に通じたならば、註解を捨てて本文について考えなければ、正

\* 国際文化学科

意を得ることができないもので、いまの学者は、註家の忠臣で作者の叛臣であると評した」と述べる。『莊子解』末尾所載の内藤湖南の跋文は、「その注釈は、枝葉を払いのけて、神髓を明らかにしている。注釈が端正であることは、向秀・郭象を凌いでいる。ただ二篇だけの注釈だが、『莊子』の奥深い意味を明らかにして、余すところがない」と述べる。これらの資料、先行研究から一宅の学問を推測してみると、古典に対する注釈ではなく古典の本文そのものに真摯に向き合い、その奥深い微妙な意味を探り出そうとする姿勢を持っていたことが窺われるのである。

### 3.『莊子解』の分析

ここから章を改めて、『莊子解』の中身の分析を試みてみよう。『莊子解』は、最初に総論とも言うべき「莊子論」を載せ、その後、注釈としては「逍遙遊篇」「齊物論篇」の二篇で終わっている。「莊子論」は、『莊子』という書物全体を見通した上での論となっていると見られることから、考察に当たっては、この「莊子論」と「逍遙遊」「齊物論」二篇の注釈を合わせて考えることとしたい。

最初に注釈の態度について考察し、次いで注釈の内容について分析していく。

#### 3-1 注釈の態度

『莊子解』を眺めてみると、いくつか特徴的と思われる事柄を指摘できる。以下に見ていこう。

##### (1) 文字の解釈

ある文字の意味を、分かりやすい他の文字に置き換えて解釈する場合、○は△の転声という注釈をすることがある。いくつか例を挙げてみよう。

【本文】之二蟲又何知。（逍遙遊篇）

<注>之の字は、是の転声。（之字、是之転声。）

【本文】世蕲乎乱、孰弊弊焉以天下為事。（逍遙遊篇）

<注>蕲の字は、求の転声。乱とは、乱を治めるを謂う。孰の字は、誰の転声。（蕲字、求之転声。乱者、謂治乱。孰字、誰之転声。）

【本文】南郭子綦、隠几而座、仰天而嘘、嗒焉似喪其耦。（齊物論篇）

<注>隠の字は、倚の転声。几の字は、机の転声。（隠字、倚之転声。几字、机之転声。）

発音が似ている場合とそうでない場合とがあるのだが、難しい文字や意味の紛れやすい文字を易しく分かりやすい他の文字に置き換えて、意味を明示しようとする意図がここに窺える。

##### (2) 省略の補足

本文に無い文字を補って、分かりやすくするということがしばしば見られる。以下に例を挙げよう。

【本文】之二蟲又何知。（逍遙遊篇）

<注>蟲の下には、「不及知之」の四字が省略されている。思うに、「又」の字で、そのことが分かる。そうでなければ、「又」字は余計なものとなる。いったい古書で文字を省略するのは、詳しく文字に表現しても煩わしくなく、文字を重ねすぎて本意を乱すのを嫌うからである。ここでは、「又」の一字で意味を表わしている。そこで「不及知之」の四字が省略されているのが分かるのである。（蟲之下、省不及知之四字。蓋以又字見其意也。不然、又字無所承而為蛇足。凡古書省略之法、在用字之審詳而去煩也、惡其至於繁辭反累本意也。今如此句、著一又字、以成語矣。乃見省不及知之四字。）

【本文】天下莫大於秋毫之末、而太山為小、莫壽乎殤子、而彭祖為夭。（齊物論篇）

<注>天下の上には、「今若為」の三字が省略されている。つまり、今もしかりに世の中に秋毫の末よりも大きいものが無い云々と言うのであれば、また言うべきことが無い。この上文では、「吾所謂之果」が有か無かが分からないと言っているのである。下文の「大道不称、大辨不言」の語と、併せて考えるべきである。そこで、秋毫が大であり、太山が小であることが分かる。（天下之上、省今若為三字。言今若假設為天下莫大云々、則無又可言矣。此上文所以未知吾所謂之果有乎無乎。下文大道不称、大辨不言之語、可相鑒也。乃可知秋毫之大、太山之小矣。）

本文にある文字を手掛りとしつつ、本文にあるはずの文字を推定して、文意が良く分かるように文字を補うことが意図されている。

##### (3) 引用の仕方

『莊子解』では、文章の意味をより明らかにするために、『莊子』本文の他の篇や、他の中国古典からの引用が数多く見られる。

『莊子』本文の他の篇としては、内篇「大宗師篇」からの引用が4箇所と最も多く、内篇ではほかに「養生主篇」「人間世篇」「応帝王篇」から引用がある。外篇で

は、「繕性篇」3箇所のほか、「天地篇」「天道篇」「刻意篇」「秋水篇」「田子方篇」から引用がある。雑篇では、「寓言篇」から2箇所の引用がある。

所謂四書からの引用としては、『孟子』が23箇所と最も多く、次いで『論語』6箇所、『中庸』3箇所、『大学』1箇所となる。

経書からの引用としては、『詩経』4箇所のほか、『易経』『書経』『左伝』から引用がある。

諸子からの引用としては、『荀子』6箇所のほか、『列子』『韓非子』『墨子』からの引用がある。

『孟子』からの引用が23箇所ととりわけて多いのは、一宅が若い頃に四書を中心に学んだことが影響している。また、諸子の中で『荀子』の引用が6箇所と比較的多いのは、一宅の学問の傾向を窺わせるものとして興味深い。

他書を引用する場合、『莊子』本文中の特定の文字の意味や文字の異同を明らかにしようとする場合が多いようであるが、それに止まらず、『莊子』本文の意味をより明らかにし、それを古典に普遍的なものとして位置づけようとする意図のもとに行われることがある。いくつか例を挙げてみよう。

【本文】化而為鳥、其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。（逍遙遊篇）

<注>「化」とは、翼を生じるを言う。この「化」字は、古人が同じように論じている。『論語』では、

「性、相い近し。習えば、相い遠し」と言う。『孟子』では、「人皆な以て堯・舜となるべし。亦た之を為さんのみ」と言う。『荀子』では、「堯・舜なる者も生まれながらにして具わる者に非ず。夫れ变故に起り修に成る。修の成るを為すは尽くして而る後に可なる者なり」と言う。これらにより古人が生まれつきの性質を尊ばないで、必ず変化を務めたことが分かるのである。思うに、習いて修め尽くせば、智慧として翼を生じることができる。智慧として翼を生じれば、大いなることを為すことができるのだ。（化者、謂生翼。此化字、古人所以同揆也。故孔子曰、性相近也、習相遠也。孟子曰、人皆可以為堯舜、亦為之而已矣。荀子曰、堯舜者、非生而具者也、夫起於变故、而成乎修、修之為成、盡而後可者也。可以觀古人尚質性、必以变故為務也。蓋習為修盡、乃智所以生翼也。智生翼、而可以有為矣。）

『論語』『孟子』『荀子』を引き、鯉が化して鵬となることについて、「化」すとは、後天的な学習によって大きなものになることであり、それが古典の中に広く見られる見解であることを論証する。

【本文】若夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊無窮者、彼且惡乎待哉。（逍遙遊篇）

<注>「天地之正」というのは、我が拠って立つ貴賤の分である。考えてみるに「天道篇」では、「夫れ尊卑先後は、天地の行なり。聖人はここに象を取る」と言う。同じく「天道篇」では、「夫れ天地は至神なるも、而も尊卑先後の序有り。而るを況んや人道をや」と言う。『荀子』では、「天有り地有りて、上下に差有り。明王始めて立てば、国に処するにも制有り。夫れ兩貴の相い事うる能わず、兩賤の相い使うる能わざるは、是れ天数なり」と言う。『易経』『繫辭伝』では、「天は尊く地は卑しくして、乾坤定まる。卑高以て陳なりて、貴賤位す」と言う。『左伝』では、「天に日月星辰有り、地に山沢卑高有り、人に貴賤尊卑有り」と言う。その他にも数え切れないほど記述があり、広く考えるべきである。（天地之正者、謂我所處貴賤之分。按天道篇曰、夫尊卑先後、天地之行也、聖人取象焉。又曰、夫天地至神、而有尊卑先後之序、而況人道乎。荀子曰、有天有地、而上下有差、明王始立、處国有制、夫兩貴之不能相事、兩賤之不能相使、是天数也。易繫辭伝曰、天尊地卑、乾坤定矣、卑高以陳、貴賤位矣。左伝曰、天有日月星辰、地有山澤卑高、人有貴賤尊卑。其他不可勝數、可博考。）

「天地之正」が「貴賤の分」を表わすことについて、『莊子』の他の篇はもとより、諸子の書である『荀子』、経書である『易経』『左伝』にも広く証拠が求められるとし、古典に普遍的な解釈であることを示さんとするのである。

一宅のこうした引用の仕方を見ると、典拠を同じ『莊子』の他の篇に求めるのは勿論なのだが、四書・経書を中心としながら、幅広く古典に証拠を求め、正しい文義を追求せんとする一宅の姿勢が窺われるように思われるのである。

### 3-2 注釈の中身

注釈の中身については、まず『莊子解』の前に付され、一宅の『莊子』理解の全体を窺わせる「莊子論」について検討し、次いで『莊子解』の注釈の内容の検討に入っていこうと思う。

#### (1) 「莊子論」の検討―「道」と「徳」

「莊子論」では、『莊子』という書物が何を論じており、その思想をどのように捉えることができるのかが問題とされる。『莊子』全体の内容を見通した論文と考えられる。以下に、一宅の所論を見ていこう。

『莊子』というのは、徳を論じるものであり、道を論じるものではない。その内容を考えてみると、徳は源で、道は流れである。源が濁れば流れも濁り、源が澄めば流れも清らかになる。だから徳が修まれば、道は治まった状態になり、多くの俸禄が得られる。徳が汚れると、道は乱れた状態になり、さまざまな危険や辱め、滅亡がたちまちのうちにやってくる。従って、徳というのが、栄辱・安危・存亡の源なのである。（莊子、論徳者也、非論道者也。其意蓋以為、徳、源也、道、流也。源濁則流濁、源清則流清。是故徳修則道出於治、而百禄在其中矣。徳汚則道合於乱、而危辱滅亡、可立而待也。是徳者、栄辱・安危・存亡之源流也。）（莊子論）p3。

『莊子』は、「徳」のありかたを論じるもので、「徳」というのは、社会における人間のあり方、すなわち出世の具とか、危険に会うかどうかとか、滅亡に至るかどうかといった、人間の生存の良し悪しのもとになるものと言う。

何を徳と言うのか。心術にある。だから、心術が正しければ、徳が修まり、徳が修まれば、人がそれに服し、人がそれに服すれば、世の中全体がそれにつき従う。殷の湯王・周の武王がそれである。心術が正しくないと、徳が汚れる。徳が汚れると、人はそれに服さない。（何謂徳。曰在心術也。故心術正則徳修矣、徳修則人服焉、人服而天下歸之。湯武是已。心術不正、則徳汚矣。徳汚則人不復焉。）（莊子論）p3

「徳」のありかたは、「心術」、すなわち心の持ち方に掛かっている。心の持ち方が正しいと、世の中全体が自然とその人に付き従うようになるのだと言う。

そこで、聖人賢者が世の中を憂いてこれを救おうとする際には、必ずまず君主の心術を調べ、心術が正しければ徳が修まっているとする。（是以聖賢憂世欲救之、則必先責其君之心術、心術正而徳修焉。）（莊子論）p4

優れた聖人賢者が世の中を救おうとする際には、必ずまず君主の心のありようを問題にすると言うのである。

「莊子論」では、『莊子』という書物を、何か抽象的な「道」といった事柄でなく、人間の持つ「徳」を問題とし論じている書物として捉え、その「徳」の要諦は、君主の「心術」、すなわち心の持ち方に帰結するのだと言うのである。

## （2）『莊子解』の検討―「人道」と「心術」

次いで、『莊子解』に窺われる一宅の見解を見てみよう。前項で見たように、「莊子論」では、『莊子』が「徳」や「心術」といった人間のありかたを論じた書物

であることを指摘しているのを見たが、一宅の『莊子』注釈に、当然そういった見解が窺われるのではないか。

一宅は、『莊子』の中で取り上げられている「道」を、「人道」とであると解釈する。

【本文】彼は莫得其偶、謂之道枢。（齊物論篇）

<注>道とは、人道のことを言う。人道には、親疎・貴賤の区別があるが、その中で人は、喜怒哀楽が次々移り変わるように変わらないわけにはいかない。応接するところに従って、程好いところを得ているのを道と言う。だから、君主に対しては臣下の節義を尽くし、郷にあつては長幼の節度を守り、年長者に対しては子弟の節義を保ち、幼少の立場であれば人につき従う。親しい者に接する場合と疎遠な者に接する場合と、差が有り変わらないわけにはいかない。（道者、謂人道。人道者、親疎貴賤之等、而不得不移易猶喜怒哀楽之相代乎前也。所接而応之、得其中謂之道。故遇君則修臣下之義、遇郷則修長幼之義、遇長則修子弟之義、遇幼則修告導之義、遇親遇疎、無不有差等而移焉。）p70～71

「道」とは、「人道」、すなわち人のありかた、関係性である。人のありかたである以上、そこには、親しい者と疎遠な者とか、高貴な者と卑賤な者とかいう区別があり、その場合場合によって、人の身の処し方が変わってくるものである。君主に対しては臣下の礼を尽くし、郷党の中では長幼の序を重んじるといった具合である。

【本文】是非之彰也、道之所以虧也。道之所以虧、愛之所以成。（齊物論篇）

<注>道とは、人道である。虧けるとは、不足を生じて不完全であることを言う。日食、月食のようなものである。思うに、異なることに執着すると父子の情愛を損ない、兼愛に執着すると親疎の関係を損ない、人道が不完全となる。愛とは、愛憎のこと。おのおのの好むところを愛して是とすることを言う。（道者、人道也。虧者、謂有生不足而不全。如日月之食、是也。蓋執殊別、則虧父子、執兼愛、則虧親疎、人道不全也。愛者、愛憎也。謂各愛其所好以為是也。）p79

そうした「人道」、人間の関係性の中では、親疎や貴賤という秩序の中で、しかるべき態度が決まってくる。そうした態度を取らず、ことさらな愛情を働かせると、「人道」が乱れることになる。

こうした人間界の親疎や貴賤といった秩序は、自然にあるものであり、その意味で正しいものだと、一宅は主張する。

【本文】道悪乎往而不存、言悪乎存而不可。（齊物論篇）

＜注＞身分の高い者に対してはそれに相応しい道があり、身分の低い者に対してはそれに相応しい道があり、親しい者に対してはそれに相応しい道があり、疎遠な者に対してはそれに相応しい道があり、普段の務めに合わせていけば、庶民の行うことのできるところに、道が存在している。そこに真偽の区別などあるはずがない。（適尊有尊之道、適卑有卑之道、適親有親之道、適疎有疎之道、寓諸庸、而匹夫匹婦之所能行、無往道不存焉、則不可有真偽也。）p66

身分の上下、関係の親疎、それらの人間関係には、それぞれに相応しいありかたが定まっており、そしてそれは誰にでもできることなのである。

【本文】若夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊無窮者、彼且惡乎待哉。

＜注＞天地の正と言うのは、我が拠って立つ貴賤の分である。……人間界の貴賤の区別を天地自然の正しいものとするのは、古人はみなそう考える。莊子だけではない。（天地之正者、謂我所處貴賤之分。……夫以人倫貴賤之分為天地自然之正者、古人皆以然也。豈獨莊子哉。）p23

人間界にある貴賤といった秩序は、「天地の正」、すなわち自然にある正しいものである。

【本文】庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣。（逍遙遊篇）

＜注＞もしも料理人が厨房に立たず、神主がそれに代わって厨房を治めるならば、それ以上の混乱はない。どうして肅々と整うであろうか。天下を治めることも同様である。天子から庶民にいたるまで、それぞれ役割があり、その地位にあり、その職に与って、互いに越えることがない。そうであって世の中は肅々と整うのである。これが天地の正と言うことだ。（若以庖人不治庖、尸祝越樽俎而治庖宰、則乱莫大焉矣。焉乎在肅々齊々哉。雖治天下、亦然也。自天子至於庶人、各有分職焉、而踐其位、共其職、不得相踰越矣。乃天下所以肅々齊々也。夫此之謂天地之正。）p28

つまり、天子から庶民に至るまで、人間にはそれぞれに役割というものがあ、それぞれの役割を十分に果たすことが、自然で正しいことだとするのである。

人間は、こうした自然であり正しい「人道」の秩序に対して、どう身を処していったら良いのか。先の注釈にも窺われるように、場合場合に合わせて、ふさわしい身の処し方、態度を取ることが要請されるわけだが、そこで心のありようは如何に捉えられるか。

【本文】故曰、至人無己、神人無功、聖人無名。（逍遙遊篇）

＜注＞しかしながら、さまざまな事象が変化しても、知が行き詰まらずに自由自在に振舞えるのは、心術にそのもとがある。いったい心術についての事柄は、直接に議論することができない。（雖然、其所以千變萬化、而知無所困、以遊無窮者、凡在心術矣。凡在心術者、不得直指正義焉。）p26

さまざまな事象の変化に対応して自由自在に振舞うことができるのは、「心術」、すなわち心の働きによる。

【本文】堯治天下之民、平海內之政、往見四子、藐姑射之山、汾水之陽、窅然喪其天下焉。（逍遙遊篇）

＜注＞無己、無功、無名のおおもとが、その精神が集中して他物に傷つけられないことにあるのは、明白である。思うに、集中すると精神が分散しない。精神が分散しないと、さまざまな物がその心をさわがせない。さまざまな物が心をさわがせないと、心が純一になる。純一であれば至誠となり、至誠であれば正しい道が生じる。正しい道が生じれば、物は離れることができない。無窮に遊んで物がそれを傷つけないことになる。（然則其所以無己無功無名之源流、全在其神凝使物不疵癘、明矣。蓋凝焉則神不散、神不散則萬物無足以撓其心者。萬物無足以撓其心者、則純。純則至誠、至誠則道生焉。道生焉而物不能離。是所以遊無窮而物莫之傷也。）p36

精神が集中して他物に傷つけられない状態であれば、心が純粋で専一になり、心の誠があらわれて他物にわずらわされず、自由自在となる。

【本文】其有真君存焉。（齊物論篇）

＜注＞心が使わなかったら、雷が側で鳴っても耳は聞くことができず、太山が目の前にあっても目は見ることができない。これは自分自身を治めたり使ったりすることができないわけだから、他者を治めたり使ったりできないのは当然だ。心が使えば、目は明らかに見るし、耳はさくと聞くし、身体全体が、それぞれにその能力を発揮し、その務めを守って乱れることがない。あらゆる作用に欠けるところがないのだ。とすると、先が見ることができないということは、目が暗いからでなく、聞くことができないのは、耳が詰まっているからでなく、心がそれらを使わないので、耳や目がその務めに当たらないからだ。是非が程よく的中しないのも、同様である。ただ聖王が働きを為せば、是非は共に宜しきところを得て、人道が全うされるのだ。（然而心不使之、則雷在側而耳不能自聞、太山当前而

目不能自見、此不能自治自役、而況能治彼役彼乎。心使之、則目明焉、耳聰焉、百骸九竅、各馳其能、而當其務不亂焉。乃百用無闕矣。然則向之不能見者、非目之盲也、不能聞者、非耳之聾也、非心使之、則耳目不能自當其務也。是非之不能自中、於是亦然矣。唯聖王用之、則是非俱得其是、而人道全焉。) P58

心がしっかり確立されていれば、目や耳の働きが存分に発揮されるように、聖王が十分な働きを果たせば、世の中の是非は相応しいところに落ち着き、「人道」が全うされるのだと言う。

【本文】彼は莫得其偶、謂之道枢。(齊物論篇)

<注>道とは、思うに環のようなもの。枢とは、我がそれに当たる。だから、君主に対しては臣下の義を修めるのが正しく、郷党にあって臣下の義を修めるのは間違っている。年少者に対しては教導の義を修めるのが正しく、年長者に対して教導の義を修めるのは間違っている。道の動きは環のようなもので、それに対応して正しさを失わないのは、我がそれを維持しているからである。我が正しいことを比べて流動するのではない。つまり、正しいことが変化し、我が先の正しいことを離れて、今の正しいことに対応するから、常に正しさを失わないのだ。ではあるが、これを天に照らすのでなければ、どうして常に正しいことを期待できようか。もしも天に照らさなかったら、我によることになり、我によるのであれば、それはまた一つの是非の区別となり、常に正しいとは言えない。これが聖人がよらないで必ず天に照らす所以である。これがまた、明を以てするに若く莫しということなのだ。(道、蓋如環也。枢、則我是也。故遇君而修臣下之義、則是也。遇郷而修臣下之義、則非也。遇幼而修告導之義、則是也。遇長而修告導之義、則非也。道之運轉如環、而応之不失其是者、我持之也。非我比於是而流動也。乃是運而移、則我離曩之是、而応今之是、是所以恒不失是也。雖然非照之于天、惡乎期而得恒因是哉。若不照之于天、則將由我、由我則亦一家之是非、而不得恒因是也。是所以聖人不由而必照之于天也。此亦所以莫若以明也。) p71

ことさらなことをせず、自然な秩序、すなわち、君主に対しては臣下の態度を取り、年少者に対しては教え導く態度を取るといった、自然で正しいありかたに身を処していくことにより、聖人と言われるような、理想的な境涯を実現できるとするのである。

以上、『莊子解』に窺われる、一宅の思想を見てきた。一宅は、貴賤・尊卑といった人間社会の秩序だったありようを、「人道」とし、自然で正しいものだと思なす。そこで、そうした秩序の中で、心を純粹で誠の状態に保ち、ことさらなことをせず、君主に対しては臣下としての分を尽くし、年少者に対し

ては教え導くことに留意するといった、それぞれの持ち分、場合場合に相応しいありかたを実現することを目論むのである。

#### 4.おわりに

本論では、照井一宅の『莊子解』について考察してみた。一宅は、『莊子』を、何か抽象的な概念である「道」を問題としているのではなく、もっと具体的な人間の持つ「徳」のありかたを論じた書物として捉えていると言える。その上で一宅は、人間社会にあるさまざまな秩序のありようを、自然で正しいものであると捉え、その中で人間が如何に理想的に振舞えるかといったことに注目し、その思考を展開していると思われる。

冒頭触れたように、一宅の思想については、中村安宏氏が、人間の本質を「交り」にあるとし、「人ヲ服スル」ためにどうしたら良いかを追求していると指摘しているが、ここまで分析した『莊子解』の理解を見てみても、やはり一宅が「人道」としての世界に注目し、そうした人間社会での身の処し方、心の持ち方を深く考えていたことが窺えるのである。

『莊子解』に窺われる一宅の思想が、一宅の思想全体の中でどういう意味を持つか、また一宅の思想の特色がどの辺りにあるのか、代表作『論語解』を含む他の著作の分析が必要となつてこよう。今後の課題としたい。